

『文學報國』における詩

原田龍一（経済学部4年）

指導教員：山本武男

戦前期の詩や詩人などの研究史を振り返ると、高村光太郎や菊池寛といった積極的に戦争協力した作家たちを中心に書かれたものや、反戦詩や言論統制に抵抗する詩を発表した金子光晴などを取り上げたものが豊富である。また戦時下に詩壇と距離を置き沈黙を保っていた永井荷風の記事が、当時米軍の勝利を予想するなど冷静に俯瞰しながら時代を生き抜いた資料として重要視されてきた。

本研究で取り上げる『文學報國』は情報局第五部第三課に属した日本文学報国会の機関紙であり、1943年8月から1945年3月まで発行された。この『文學報國』上の詩を作品群として考察の対象とし、戦争詩の性格を探っていくことで、作家個人の背景や思想などからの検討とは別の視座が得られることが期待できる。多くの詩に見られた特徴を以下に示した。

『文學報國』上の詩の中で戦場のおぞましさを伝える手法として、戦地あるいは国内の本来あるべき姿（草花、珊瑚、夕日に染まる海岸など）を提示し、それが敵によって奪われてしまうという流れで描くことで、いかに米英が許せない存在であるかを印象付けるというものが見られる。自然や景観がいかに美しいかを詩ならではの叙情的な表現によって彩り、記事の文章だけでは伝わらない復讐心が沸く動機を読者に訴えかける効果が考えられる。

日中戦争から太平洋戦争にかけて、度重なる空襲により本土が各地で傷を負った。総力戦における詩の役割として詩も弾となるようにして前線の兵士と同じ緊張感をもって生活するという思想を広める点があげられる。作家にとっての詩に限らず農民にとっての米、市民にとっての貯蓄にあたるまで繋がりを帯びてくるという考え方が多くの詩に表れている。

戦地での皇軍の戦いぶりについて書かれた詩に「神業」という言葉が用いられるほか、大東亜共栄圏の中心である「大和島根」という言葉も古事記にある八百万神の物語が反映されていると考えられ、日本という国を作った古事記の物語を大東亜共栄圏（詩中ではアジヤと称している）を作り上げる日本自体に重ね合わせるかのような構成になっている。これは大東亜共同宣言を讃える詩において、アジヤという言葉とともに「八紘宇」や「八雲立つ」といった表現が見られることから連想できる。